

【研究ノート】

カロリング朝期写本の物語イニシアル —基礎資料と研究動向—

安 藤 さやか

本稿では、西欧中世のカロリング朝の写本のうち、物語イニシアルと呼ばれるものの作例を収集し基礎資料を作成する。物語イニシアルは、テキストを読む為に書かれた文字であると同時に、挿絵として描かれた図像でもあり、また、テキストの切れ目を強調する為に装飾された記号でもあった。本研究は、西欧中世写本にとどまらず、文字と画像と装飾とがいかなる関係にあったのかの一端を考察するものである。

1. カロリング朝期に於ける装飾

「画像は装飾のために、あるいは事績を見せるために作られるものである¹⁾」「教会の装飾として、また、行われた事績の記憶の為に画像をもつ²⁾」——これは、791年頃にフランク王国カール(後のカール大帝、Carolus Magnus、在位768-814年)によって発布された、『リブリ・カロリーニ (*Libri Carolini*)』、或いはより正確には『カールによる図像についてのカピトゥラリア (*Caroli Magni Capitulare de imaginibus*)』と呼ばれる書物の中に見られる記述である³⁾。東ローマ帝国では726年以降、皇帝レオン3世およびその息子コンスタンティノス5世のもとで、聖画像の撤去や破壊、聖画像を信奉する人々への迫害が続き、754年のヒエレイア教会会議では聖画像の破壊が容認された。ところが787年の第二ニカイア公会議では一転して、皇帝コンスタンティノス6世の母エイレネによって、聖画像崇拜の正当性が認められる。この聖画像崇拜の容認を批判し反駁したフランク王国の立場を表すものが『リブリ・カロリーニ』であり、カールによって発布されたものだが、実際に構想・執筆したのはオルレ안의テオドゥルフス (Theodulfus

Aurelianensis, 750-821年) か、ヨーク出身のアルクィヌス (Flaccus Albinus Alcuinus, c. 735-804年) と考えられている。全4巻120章から構成されるこの文書には、聖画像崇拜を擁護した東方教会に対し、画像を礼拝の対象ではなくあくまでも聖堂装飾や過去の事績の記憶の為とする、フランク王国宮廷の態度が綴られているのである。

カロリング朝期の宮廷人らがテキストと画像との関係をどのように位置付けていたのかという点で、『リブリ・カロリーニ』は美術史家らの関心を惹きつけてきた⁴。しかしその一方で、同書はローマ教皇ハドリアヌス1世(在位772-795年)の承認を得たものではなく、聖画像崇拜を容認した第二ニカイア公会議に反発するカールに対し、ハドリアヌスはこの公会議の内容が異端ではないことを説いている⁵。したがって、『リブリ・カロリーニ』で表明されている画像に対する思想が、果たして実際に当時の芸術制作に反映されたのかについては、議論の余地があるだろう。

同書は、画像の主たる役割を文字の読めない者の教化とした教皇グレゴリウス1世(在位590-604年)の思想を基本的には踏襲し⁶、画像に対しあくまでも文字で書かれた内容を優位に置いている。しかし、中世キリスト教美術の歴史の観点から『リブリ・カロリーニ』の記述で注目すべきは、随所で画像の機能として「装飾 (ornamentum)」という言葉が強調されている点である。これは、グレゴリウス1世の画像論には見られないものである。イングランドの神学者であり歴史家である尊者ベダ (Beda Venerabilis, 672/3-735年)は、画像の役割として観者の教化に加え教会の装飾を挙げており⁷、それがフランク王国の宮廷人の思想に受け継がれている。

ベダの説話や『リブリ・カロリーニ』で画像の役割として言及されているのは聖堂の装飾であり、書物の挿絵や装飾ではない。しかし、聖書写本に、過去の事績を示すような挿絵としての機能と、文頭を際立たせる装飾としての役割とを同時に担う、「物語イニシアル」と呼ばれる挿絵形式が初めて登場するのは、確認されている限りではイングランドであり、多くの作例が見出せるようになるのはまさにカロリング朝期のことなのである。

このカロリング朝期に於ける物語イニシアルの隆盛に、『リブリ・カロリーニ』の思想が反映されていたのかについては、研究者らの間では議論が

分かれている。U. エルンストは、794年のフランクフルト宗教会議での決定と『リブリ・カロリーニ』に見られる画像についての思想が、少なからずカール大帝周辺のスクリプトリウム（写字室）での物語イニシアルの展開に帰結したと考えた⁸。それに対しB. ブレンクは、そもそも『リブリ・カロリーニ』のテキスト自体が当時広く知られていなかったことから、こうした影響関係に否定的な態度を示している⁹。カロリング期の物語イニシアルが、画像に対する当時の宮廷の神学的態度を反映したものだったのかについての議論には、写本の成立環境や使途をふまえた、作品ごとのより詳細な個別研究が必要になるだろう。

2. 物語イニシアルの成立と研究史

物語イニシアルとは、中世写本の挿絵形式の一つであり、テキストの冒頭の一文字が、テキストの内容に関連する図像を持つ文字装飾を指す¹⁰。文字に図像を組み込むには、大きく分けて2つの方法がある。ひとつには、DやO、Qといった開口部を持つ文字を枠として用いるものであり、「図像を包囲するイニシアル」と呼ばれる。もうひとつは、人物像や動物といったモチーフそのもので文字を構成する方法であり、「形象イニシアル」と呼ばれる¹¹。

イニシアルが単なる強調文字ではなく、動物や人物像等のモチーフを含むようになった初期の例は、既に6世紀のイタリア半島やイベリア半島、北アフリカの諸写本に見出すことが出来る¹²。しかし、イニシアルの図像の内容が明確に、それに続くテキストに関わる内容を表すようになった最初期の例は、アングロ＝サクソン写本に求められる¹³。例えば、8世紀第2四半期にカンタベリーで制作された《ウェスパシアン詩編》（ロンドン、大英図書館、Cotton MS Vespasian A I）では、ふたつのイニシアルDの開口部にテキストと関連する場面が描かれる¹⁴。加えて、同写本とほぼ同時期にノーサンブリアのウェアマス＝ジャロウで制作された『イギリス教会史』写本（サンクトペテルブルク、国立図書館、Lat. Q v I 18）にも、同写本テキストに記述される聖アウグスティヌスを胸像として描いたイニシアルが見られる¹⁵。

ヨーロッパ大陸で物語イニシアルが確認されるようになるのは、カロリング朝の成立時期、即ち、8世紀中頃から8世紀末にかけてのことである。例えばフランス北部のモー司教区で制作されたと目される《ジェローヌの典礼書》(パリ、国立図書館、Ms. lat. 12048)では、文字の形そのものにモチーフを当てはめて後続のテキストの内容を示唆するイニシアルが登場する¹⁶。物語イニシアルという挿絵形式がアングロ＝サクソン写本からもたられたもののなのか、或いはアングロ＝サクソンとフランク王国の双方で多元的に成立したものなのかは不明だが、カール大帝の時代までには、図像を包囲するイニシアルと形象イニシアルとの双方の装飾形式が、フランク王国中核地域の有力な写字室に知られていたことは確かである。カール大帝宮廷派の《ハーレー福音書》(ロンドン、大英図書館、Harley MS 2788)をはじめとして、福音書扉頁の大型イニシアルの中に聖書の物語場面が表される例が見られ¹⁷、コルビー修道院で制作された《コルビー詩編》(アミアン、市立図書館、Ms. 18C)には、図像を包囲するイニシアルと形象イニシアルとが数多く含まれている¹⁸。物語イニシアルはこれ以降、メッツやトゥールといった主要な写字室の彩飾写本に登場することになるのである。

西欧中世写本のイニシアル装飾を扱う研究史は19世紀末頃に始まる。K. ランプレヒトが、島嶼地域とその影響下の大陸写本の組紐文イニシアルを中心とした研究を行い¹⁹、20世紀前半にはA. シャルトやE. ヴァン・モエの研究もこれに続いた²⁰。1960年代以降、イニシアルの形態や図像を分析する研究が現れ、E. J. ティールは初期中世のイニシアルを、J. ゲートプロートは初期中世からロマネスク写本までを中心に、イニシアルをその形状の特徴に従って分類した研究を行った²¹。その後、O. マツァールやW. ザウアーレンダーもイニシアル装飾の通史を扱った小論考を刊行した他²²、O. ペヒトはイニシアルの造形について、著作の中で一章を割いている²³。一方、ビザンティン写本ではイニシアル装飾という彩飾形式がそもそも西欧に比べて一般的ではない為に研究は少ないものの、L. ブルーベーカーやE. マーヤン＝ファナーらの論文によって取り扱われている²⁴。日本国内では、斎藤稔氏がゲートプロートの研究に基づきイニシアルのみを扱った著書を上梓した他²⁵、越宏一氏の諸研究でもたびたび取り上げられてきた²⁶。

イニシアルに関する研究史に於いて、特に初期中世の物語イニシアルに焦点を合わせ、多くの作例を集めて俯瞰的に見渡したのがCh. ヤコビ＝ミアヴァルトである。ヤコビ＝ミアヴァルトは、物語イニシアルを含む8～9世紀の写本をカタログ化し、形態の特徴や図像とテキストとの関連について分類して体系付けようとした²⁷。但し、同研究は個別作例の詳細な分析には立ち入らず、取り上げる作例もフランク王国中核地域、即ち、現在のフランス東部からドイツ西部にかけての地域で制作された写本に留められている。物語イニシアルの作例が増加したカロリング朝期に於ける文字・画像・装飾の関係とその役割を考察するためには、フランク王国の支配地域の広さを考慮するならば、取り上げる作例の対象地域を拡大する必要があるだろう。従って以下では、カロリング朝期のイタリア半島に由来する物語イニシアルの作例を含めて目録化することで、ヤコビ＝ミアヴァルトによる研究を補完し、カロリング朝期の物語イニシアルの総体把握を試みる。

3. 作例と基礎資料

以下では、カロリング朝期の彩飾写本のうち、ヤコビ＝ミアヴァルトによるカタログに含まれていない写本6点を挙げた。これらの写本の基本情報を記載し、描かれている図像の概要と先行研究での解釈を纏めた。ここに挙げた作例は、以下の基準で選出した。①イニシアルに人物像が含まれるもの：動植物モチーフのみから成るイニシアルにも物語イニシアルと呼ぶ例は含まれうるが、それらの図像がテキストの内容と関連しうるかどうかの判断には詳細な図像分析が必要となる為、本稿では人物像を含むもののみとした。②聖書・典礼書写本：カロリング期には法典写本等にも物語イニシアルを備える例が確認出来る。但し、ここではキリスト教美術に於ける装飾の意義という観点から、聖書・典礼書写本といったキリスト教写本のみに対象を絞った。③対象地域と時代：初期中世の彩飾写本には制作地や制作年代が不確定な作例も多い。従ってここでは、対象範囲を政治区分上のカロリング朝時代よりやや前倒しして広くとり、後期メロヴィング朝期から中期カロリング朝期、即ち8世紀初頭から9世紀末までの、イベリア半島とブリテ

ン諸島を除く西欧の写本とした。

3.-1. トリーア、大聖堂宝物庫、Cod. Nr. 61／大聖堂図書館、Ms. 134
(figs. 1a-f)

通称：《トマスの福音書》；制作地：エヒテルナハ、或いはトリーア（？）；

制作年代：8世紀第1四半期（？）

分量：208葉；寸法：300mm×245mm

テキスト：Quator Evangelia；書体：メロヴィング・アンシャル体；イン
スラー・ハーフアンシャル体、インスラー小文字

写字生・彩飾画家：トマス、ほか1名以上

挿絵：キリストの胸像と福音書記者象徴動物 (fol. 1v)、テトラモルフ (fol.
5v)、二人の天使のいる『マタイ福音書』インキピット・ページ (fol. 10r)、
共観表 (fols. 11r-15v)、福音書記者マタイ (fol. 19v)、福音書記者マルコ (fol.
82v)、福音書記者ルカ (fol. 127v)

イニシアル：人物像イニシアル (fols. 103r, 112v)、人間の手と魚のイニシ
アル (fol. 96r)、ほか多数の動物文・装飾イニシアル

700年頃にノーサンブリア出身のウィリブロード (Willibroad, 658? -739
年)が創建したエヒテルナハ修道院のスクリプトリウムでは、インスラーの、
すなわちアイルランドやスコットランド、アングロ＝サクソンといった島嶼
地域の写本の様式的影響を受けた彩飾写本が多く制作された²⁸。修道院創建
後間もない8世紀第1四半期のエヒテルナハの写字室に帰される写本グ
ループとの、テキストや書体、彩飾の様式的類似から、本写本も同修道院写
字室で制作されたものと目されている²⁹。彩飾ページに「トマスが書いた
(Thomas scripsit)」と二度にわたって書き込まれているほか (fols. 5v, 127
v)、共観表の使徒の胸像の脇にも同じ名前が添えられており (fol. 12r)、ト
マスという名の写字生が彩飾にも関わった可能性が高い³⁰。組紐文や渦卷文
を多用した装飾イニシアルや枠取り装飾 (fols. 1v, 5v, 20r, 21r) からは、イ
ンスラー写本との強い様式的関連が看取される。その一方で、動物文から成
るイニシアルには (fols. 111r, 139r, 173r, 176v)、大陸側のメロヴィング朝



Fig. 1a : トリーア、大聖堂宝物庫、Cod. Nr. 61／大聖堂図書館、Ms. 134, fol. 96r

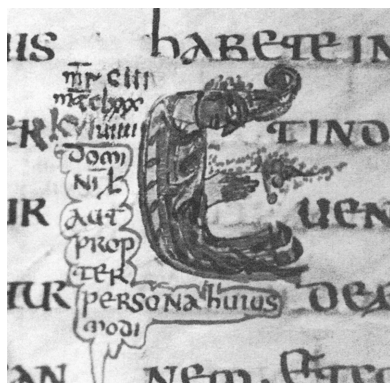


Fig. 1b : トリーア、大聖堂宝物庫、Cod. Nr. 61／大聖堂図書館、Ms. 134, fol. 103r



Fig. 1c : トリーア、大聖堂宝物庫、Cod. Nr. 61／大聖堂図書館、Ms. 134, fol. 112v



Fig. 1d : トリーア、大聖堂宝物庫、Cod. Nr. 61／大聖堂図書館、Ms. 134, fol. 141v

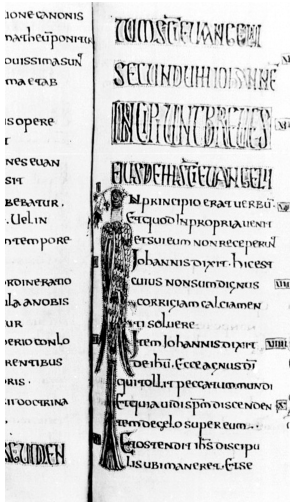


Fig. 1e: トリーア、大聖堂宝物庫、
Cod. Nr. 61 / 大聖堂図書館、
Ms. 134, fol. 177r

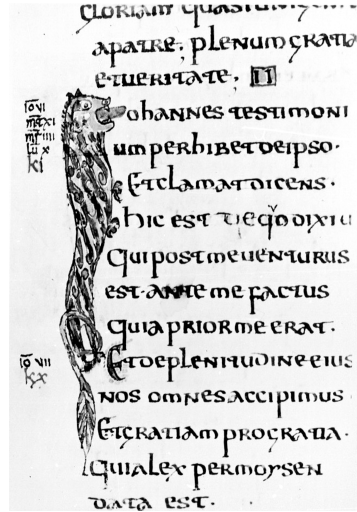


Fig. 1f: トリーア、大聖堂宝物庫、
Cod. Nr. 61 / 大聖堂図書館、
Ms. 134, fol. 180v

写本の彩飾との類似性が認められる。更には、二人の天使が銘文板を掲げる挿絵には、イタロ=ビザンティンの絵画伝統をも見出すことができる³¹。

本写本には、魚に人間の手を組み合わせたイニシャル (fol. 96r: fig. 1a) のほか、体を曲げて手を差し出す人物像によるイニシャルが2点 (fols. 103r: fig. 1b, 112v: fig. 1c) が含まれる。N. ネットアーによれば、Eという文字のクロスバーに手を用いたイニシャルとしてはこれは最初の例であり、類例は先述の《ジェロームの典礼書》、《コルビー詩編》に加え、インスラー写本の白眉である《ケルズの書》(ダブリン、トリニティ・カレッジ、MS 58) やビザンティンのギリシャ語写本(ヴァティカン、教皇庁図書館、Vat. gr. 2138) にも見出せるが、いずれも本写本より時代が下る³²。これに加え、800年頃のイタリアにも、イニシャルEのクロスバーに祝福の手を充てた例が確認できる(ヴァティカン、教皇庁図書館、Vat. lat. 3836: fig. 5b、本稿3.5参照)。人物像が胴体を曲げてつくる円弧と、手によるクロスバーを組み合わせたイニシャルも、現在確認されている限りでは本写本が最初の例である。

ネッツァーは、『ケルズの書』やコルマール所蔵の写本断片（コルマール、市立図書館、Ms. 444, fol. 1v）等のアイルランド系写本に求められる人物像イニシアルの事例から、本写本の人物像イニシアルがインスラーの先例に基づいている可能性を指摘している³³。しかし、本写本ではこれらのインスラー写本のイニシアルほど人物像が引き伸ばされておらず、ずんぐりとした量感を備えていることを考えると、この装飾語彙の起源については議論の余地があるだろう。

人物像イニシアルとそれに続くテキストとの間に、内容上の明確な関連は見出せない。動物文イニシアルも同様である。『ヨハネによる福音書』の冒頭に福音書記者ヨハネの象徴動物である鷲のイニシアルが用いられる一方で（fol. 177r: fig. 1e）、同福音書内にはマタイの象徴動物であるライオンをモチーフとするイニシアルも確認できる（fol. 180v: fig. 1f）。更には、種を特定できない動物モチーフから構成される例も含まれる（fol. 141v: fig. 1d）。従って、イニシアルに後続するテキストの内容を説明するものという意味では、本写本の例を物語イニシアルと呼ぶことは難しいだろう。

3.-2. カンブレー、市立図書館、Ms. 470 (figs. 2a-b)

制作地：北フランス；制作年代：8世紀

分量：205葉；寸法：321mm×230mm

テキスト：Beda Venerabilis/ Phillipus Presbyter, *Commentum super Job*；書体：ハーフアンシャル体

イニシアル：人物像と獣のイニシアル2点（fols. 2r, 69r）

本写本は『ヨブ記註解』をテキストとするものであり、彩飾はここに挙げた2点のイニシアルのみである³⁴。制作された地域と年代については詳細が分かっていない。美術史家E. H. ツィーマーマンは8世紀末の北フランスの作であると見做している³⁵。本文に用いられているハーフアンシャル体はアングロ＝サクソンの書体に近く、古書体学者であるE. A. ローウィは8世紀前半のヨーロッパ大陸に於けるアングロ＝サクソン系の写字室に本写本の起源を求めている³⁶。余白に書かれた書き込み（fol. 60v）から、本写本は9世紀



Fig. 2a : カンブレー、市立図書館、Ms. 470, fol. 2r



Fig. 2b : カンブレー、市立図書館、Ms. 470, fol. 69r

にはイングランドにあったと考えられる³⁷。

人物像を含む2点のイニシアルはいずれも、海獣ないしは四足獣と人間との戦いを表す形象イニシアルである。獣と人間との戦闘場面を表すイニシアルは盛期中世に増加するが、本写本はそれに先立つ最初期の例である。このうち、『ヨブ記』冒頭の「ウツの地にヨブという名の人がいた (Vir erat in terra Hus nomine Iob)」を飾るイニシアルVは、海獣の口を足で踏みつけ槍で突き刺す人物像が表される (fol. 2r: fig. 2a)。イニシアルに続くテキストに義人ヨブの名が登場し、更には海獣というモチーフは『ヨブ記』に登場するレヴィヤタンを想起させる。このことから、グートプロートはこのイニシアルの人物像をヨブと見做し、悪魔による義人の誘惑の図であると解釈している³⁸。もう一つのイニシアルUでは、犬あるいは狼とみられる四足獣と、その前足を掴み槍を向けた人物像でイニシアルが構成される (fol. 69r: fig. 2b)。しかし、『ヨブ記』18章冒頭の「いつまで、あなたがたは言葉尻を捉えようとするのか (Usque ad quem finem verba itactabitis)」という章句との関連は見出せない。ここでは、グートプロートが指摘するように、直後のテキストの内容を視覚化するというより、むしろ『ヨブ記』に記された誘惑への勝利を、より一般的な寓意として表していると言えるだろう³⁹。

3.-3. ローマ、ヴァリチェリアーナ図書館、Cod. B 25/II (figs. 3a-e)

通称：《ユウエニアヌス・コデクス》；制作地：イタリア；制作年代：9世紀初頭

分量：101葉；寸法：315mm×230mm

テキスト：Actus Apostolorum; Prologus Sancti Hieronymi; epistula; Apocalypsis Johannis, Beda Venerabilis, Explanatio Apocalypsis；書体：アンシャル体

挿絵：大天使ミカエルとガブリエルをとまなう玉座のキリストと十二使徒 (fol. 1v)；ユウエニアヌスから聖ラウレンティウスへの献呈図 (fol. 2r)；幻視を授かるヨハネ (fol. 67r)、福音書記者ヨハネ (fol. 87r)

イニシアル：使徒ヤコブ (fol. 46r)、聖ペテロ (fol. 51r)、聖ヨハネ (fol. 59r)、使徒ユダ (fol. 64v)、天使から書物を授かる聖ヨハネ (fol. 67v)、書物を掴む鷲 (fol. 66r)、鳥と組紐文 (fol. 87v)

本写本は、全頁大の献呈図 (fol. 2r) に、聖ラウレンティウスと副助祭ユウエニアヌスの名が書かれていることから、《ユウエニアヌス・コデクス》と呼ばれる⁴⁰。ローウィは本文のアンシャル体の特徴に基づき、本写本を8世紀から9世紀にかけてのイタリアの作とし⁴¹、更に美術史家らによる挿絵の様式的特徴から、9世紀の第1四半期のイタリアで制作されたとする説が有力になっている⁴²。全頁大挿絵の図像系譜学的観点からはカロリング朝初期のローマ美術との結びつきが見られるが、注文主などの具体的な制作背景は分かっていない⁴³。

人物像を含むイニシアルは、形象イニシアルが6点 (fols. 46r, 59r: fig. 3b, 64v, 67v: fig. 3d)、コイン形胸像が1点である (fol. 51r: fig. 3a)。『ペテロの第一の手紙』では、第一章冒頭のペテロの名の頭文字の開口部に四分の三面観の人物の胸像が表されている (fig. 3a)。本写本の『共同書簡』中に見られるイニシアルは、各書簡の著者像として機能していると言える。一方で、『ヨハネの福音書』の冒頭を装飾するイニシアルA (fol. 67v: fig. 3d) は、ヨハネが天使を介して神から書物を受け取る図像が表されており、著者像であると同時に、当該イニシアルに続く第1章1節のナラティブな視覚化で

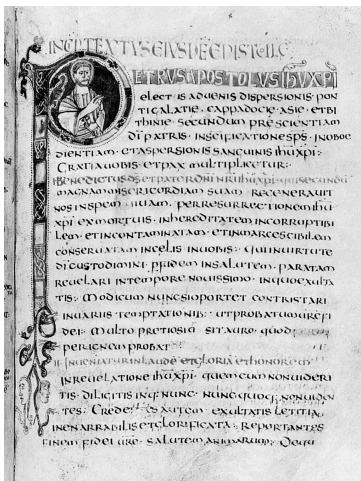


Fig. 3a : ローマ、ヴァリチェリアーナ
図書館、Cod. B 25/II, fol. 51r



Fig. 3b: ローマ、ヴァリチェリアーナ
図書館、Cod. B 25/II, fol. 59r

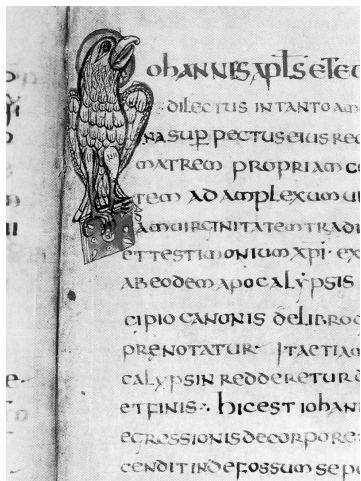


Fig. 3c : ローマ、ヴァリチェリアーナ
図書館、Cod. B 25/II, fol. 66r

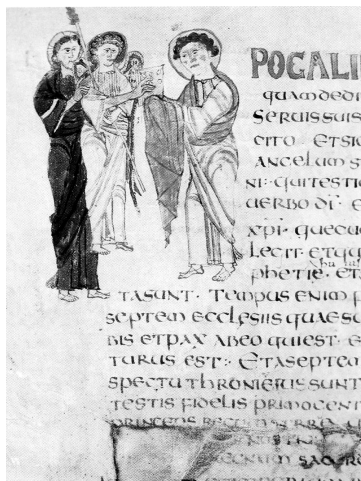


Fig. 3d: ローマ、ヴァリチェリアーナ
図書館、Cod. B 25/II, fol. 67v

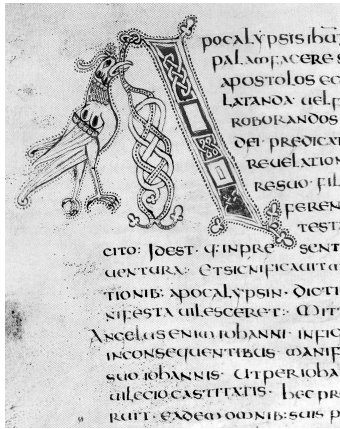


Fig. 3e : ローマ、ヴァリチェリアーナ図書館、Cod. B 25/II, fol. 87v

もある。この他、『ヨハネの黙示録』序文冒頭を飾るイニシアル I (fol. 66r: fig. 3c) には、福音書記者ヨハネの象徴動物である鷲の形象イニシアルが用いられている。ベダによる『ヨハネ黙示録註解』の冒頭を装飾するイニシアル A では (fol. 87v: fig. 3e)、鳥が組紐文をあたかもそれが蛇であるかのように啄んでいる。これは、10世紀以降イベリア半島を中心に制作された『ベアトゥス黙示録註解』写本で散見される、悪に対するキリストの勝利としての「鳥と蛇との戦い」の象徴的図像を彷彿とさせるものである。《ユウエニアヌス・コデクス》では人物像を含むイニシアルだけではなく、動物をモチーフとするイニシアルもまた、テキストの内容との関連を強く示唆しており、物語イニシアルであると見なすことが可能だろう。本写本は、現存するカロリング期のイタリア写本では、物語イニシアルを最も多く備える作例である。

3. 4. ヴェルチェッリ、司教座聖堂参事会図書館、Cod. CXLVIII/8 (figs. 4a-c)

制作地：北イタリア（ノナントラ？）、或いは南イタリア（ベネヴェント地域？）；制作年代：8世紀末～9世紀初頭

分量：270葉；寸法：282mm×220mm



Fig. 4a: ヴェルチェッリ、司教座聖堂
参事会図書館、Cod. CXLVIII/
8, fol. 72r

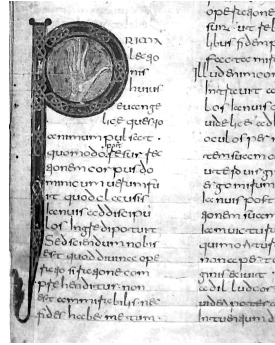


Fig. 4b: ヴェルチェッリ、司教座聖堂
参事会図書館、Cod. CXLVIII/
8, fol. 145r



Fig. 4c: ヴェルチェッリ、司教座聖堂
参事会図書館、Cod. CXLVIII/
8, fol. 185r

テキスト: Gregorius Magnus, *Homiliae in Evangelia*; 書体: 初期中世の小文字、アンシャル体

挿絵: 献呈図 (fols. 7v-8r); 大グレゴリウスの著者像 (fol. 9v)

イニシャル: ライオンを踏むキリスト (fol. 72r)、神の手 (fol. 145r)、神の子羊 (fol. 185r)、ほか多数の動物文・装飾イニシャル

ヴェルチェッリの司教座聖堂参事会図書館が所蔵するこのグレゴリウス写本は、濃色で着彩された挿絵とイニシャルとを備える⁴⁴。献呈図には、キリ

ストに書物を捧げる人物像が二人描かれており (fol. 7v)、それぞれその脇には「助祭ダヴィドベトルス (Davidpetrus diaconus)」、「聖ペテロ (Sanctus Petrus)」とインスクリプションが添えられている。制作地や年代の同定に役立つコロフォンは無く、先行研究では書体分析や挿絵・装飾の様式比較から、イタリア北部、恐らくはノナントラの修道院写字室の、8世紀末から830年頃までの間の作とされてきた⁴⁵。近年、美術史家F. クリヴェッロが本写本についてのモノグラフィックな研究を刊行し、ベネヴェントやモンテカッシーノの彩飾写本との比較を通して、本写本の制作地をイタリア南部のベネヴェント周辺とする説を打ち出した⁴⁶。しかしこの制作地の大胆な修正について、L. ニースは書評の中で反論している⁴⁷。

全身の人物像を含む唯一のイニシアルは、六句節の説教の冒頭に見出すことが出来る (fol. 72r: fig. 4a)。ここではイニシアルLが、十字杖と本を手にしたキリストと、キリストに踏みつけられたライオンによって構成される。この図像は明らかに『詩編』90編13節の記述に基づいた「竜と獅子を踏む勝利のキリスト」の図像伝統から引用されている⁴⁸。クリヴェッロによれば、詩編90編は四句節の典礼で読まれたが、詩編90編の章句に基づく図像が何故四句節ではなく六句節の説教のイニシアルに表されたかは不明である。このイニシアルLは、典礼で朗唱される他のテキストを想起させるという点で、当時のイニシアルの図像が単に後続テキストの内容を直接的に視覚化するだけではなく、関連する他のテキストの内容を引用する、間テキスト的な性格を持つことを示している。

3.-5. ローマ、ヴァティカン教皇庁図書館、Vat. lat. 3836 (figs. 5a-b)

通称：《アギムンドゥスの説教集》；制作地：ローマ；制作年代：8世紀／9世紀初頭

分量：314葉；寸法：295mm×247mm

テキスト： *Sermones liturgici* ；書体：ローマン・アンシャル体

物語イニシアル：女性の胸像 (fol. 64r)、祝福の手 (fol. 67v)

ヴァティカン教皇庁図書館が所蔵する本写本は、典礼暦に合わせて種々の



Fig. 5a : ローマ、ヴァティカン教皇庁
図書館、Vat. lat. 3836, fol. 64r



Fig. 5b : ローマ、ヴァティカン教皇庁図書
館、Vat. lat. 3836, fol. 67v

説教を集めた説教集である⁴⁹。同図書館のVat. la. 3835番写本、及び現存しないもう1冊と合わせて、もとは3巻本の浩瀚な説教集写本だったと考えられる⁵⁰。このうちVat. la. 3835番写本に残されたコロフォン (fol. 329r) に、これらの説教集写本がアギムンドゥスという名の司祭によって使徒フィリポとヤコブに捧げられたことが記されている。このため、フィリポとヤコブに献堂されたローマのサンティ・アポストリ教会の為に作られたとする説が有力である。同写本の大部分を占めるローマン・アンシャル体は8世紀のローマの様式を示しているが、一部の折丁 (fols. 55-70) は書体の違いから、やや時代の降る9世紀初頭の作と推定されている⁵¹。

人物像が組み込まれたイニシャルは、まさにこの、書体の異なる折丁に含まれている。ヨハネス・クリュソストモスによる説教に用いられたイニシャルP (fol. 64r: fig. 5a) の開口部には、正面観の女性胸像が描かれており、コインの肖像タイプの装飾方法をとっている点で《ユウェニアヌス・コデクス》と共通している。このイニシャルは、ポストラ司教アンティパトロスについての説教の冒頭を飾るものであり、聖母被昇天の祝日のためのものであ

ることから、J. オズボーンはこの女性像を聖母マリアと解釈している⁵²。この解釈が正しければ、ヴェルチェッリ所蔵のCXLVIII/8番写本と同様、イニシアルに表された図像が後続のテキストの内容を直接的に表すのではなく、その説教が読まれる典礼に関連する図像を示す例の一つに数えられるだろう。

古書体学者らによれば、この折丁の書体は他の部分と比してややぎこちなく、更には同時代のローマで書かれたギリシャ語写本（ヴァティカン、教皇庁図書館、Vat. gr. 1666）の書体と類似している。このことから、当該折丁はラテン語を筆記できるギリシャ系写生字によって書かれたとする説もある⁵³。その一方で、祝福する手のモチーフをクロスバーに充てたイニシアル E (fol. 67v: fig. 5b) は、先述の《トマスの福音書》や《ジェロヌスの典礼書》と共通している。更には、メロヴィング朝から初期カロリング朝のガリアの写本に典型的な鳥文イニシアルも 2 点確認できる (fols. 65v, 70v)。これらの特徴から、オズボーンはこの《アギムンドゥスの説教集》を、8 世紀ガリアのイニシアルの装飾方法が 800 年頃のローマで知られていたことの証左とし、こうした写本の存在がローマでギリシャ語写本に図像付きのイニシアルを仲介した可能性を指摘している⁵⁴。

3.-6. ヒルデスハイム、大聖堂・司教区博物館、Inv. -Nr. DS 68 (figs. 6a-b)

制作地：フランス；制作年代：9 世紀第 3 三半期

分量：155 葉；寸法：280mm×155mm

テキスト：Prologus et capitula Evangeliorum; Quator Evangelia；書体：カロリング小文字、アンシャル体

挿絵：共観表 (fols. 17v-22r)

イニシアル：生命の泉 (fol. 22v)、ライオンを踏む人物 (fol. 83r)、ほか各福音書冒頭に装飾イニシアル (fols. 23r, 59v, 83v, 126r)

ヒルデスハイムの大聖堂・司教区博物館が所蔵する本福音書写本は、福音書要綱の最後の追記から判断し、11 世紀にはヒルデスハイムにあったと推測されている⁵⁵。このことから、初期の研究では本写本はニーダーザクセン

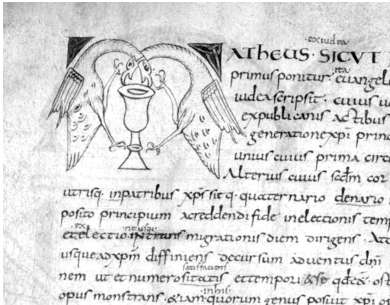


Fig. 6a : ヒルデスハイム、大聖堂・司教区
博物館、Inv.-Nr. DS 68, fol. 22v

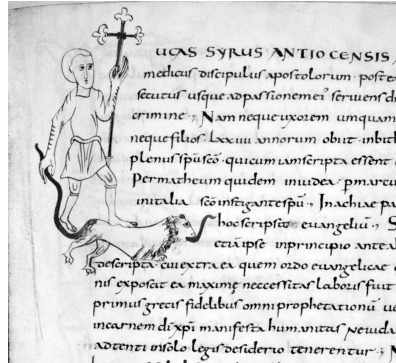


Fig. 6b : ヒルデスハイム、大聖堂・司教区
博物館、Inv.-Nr. DS 68, fol. 83r

の作と考えられていた。これに対してU. クーダーは、本写本の各福音書冒頭を飾る組紐文のイニシアルと、カロリング朝ランス派写本のそれとの類似に基づき、制作地をフランスと修正している⁵⁶。

彩飾は、共観表の装飾と、各福音書冒頭の大型の組紐文イニシアル以外には、動物モチーフや人物像を含む2点のイニシアルのみである。そのうちの一つである『マタイによる福音書』序文冒頭の「生命の泉」を表すイニシアルでは、聖杯から水を飲む二羽の孔雀によってMという文字が形作られる (fol. 22v: fig. 6a)。この図像と後続テキストの内容との関連は不明である。一対の鳥や四足獣等の動物が水を飲む「生命の泉」は、再生や復活を象徴する図像として、8世紀末までにはフランスの彩飾写本に取り入れられていた⁵⁷。従って、このイニシアルはここでは『マタイによる福音書』のテキストを直接的に視覚化するというよりは、当時普及していた象徴的図像の一般的な利用と見做すことも可能だろう。『ルカによる福音書』序文冒頭では、「ライオンを踏む人物」を主題とする図像が、形象イニシアルとして表されている (fol. 83r: fig. 6b)。四分の三面観で描かれた人物像が、十字杖を手にしライオンを踏みつけている図像は、ヴェルチェッリのCXLVIII/8番写本と共通する。しかし、このヒルデスハイム写本では人物像は十字ニンブスも冠さず書物も手にしていない為、キリストであると同定する根拠に欠く。そ

のため、この図像は詩編90編に基づく「勝利のキリスト」というよりは、カンブレー470番写本の第二のイニシアル (fol. 69r: fig. 2b) と同様、悪との戦いを表す象徴的図像として一般化された例と見做すのが妥当だろう。

結

本稿では、人物像を含むイニシアルを備えたカロリング朝期の写本6点を取り上げ、先行研究での議論を踏まえ、イニシアルの図像とテキストとの関係を考察した。イニシアルの図像が明確に後続のテキストの内容の挿絵として機能する、狭義での物語イニシアルとしては、カンブレー470番写本の第一の例、《ユウェニアヌス・コデクス》の人物像イニシアルが挙げられる。イニシアルの図像が典礼を介して他のテキストの内容を想起させる図像を持つ例は、ヴェルチェッリCXLVIII/8番写本や《アギムンドゥスの説教集》の第一のイニシアルに見られる。これらは、図像が付属テキストと間接的に関連しているという点で、広義での物語イニシアルと呼ぶことができるだろう。

イニシアルの図像とテキストとの関連が明確には見出せない例としては、《トマスの福音書》や、《アギムンドゥスの説教集》の第二のイニシアルが挙げられる。但し、カンブレーの第二のイニシアル、ヒルデスハイム68番写本のような、悪に対する勝利や、再生や復活を象徴する図像が一般化されたものとして用いられる例を考慮するならば、一見すると付属テキストの内容を直接的には視覚化しない図像を、テキストと無関係であると判断するのは難しい。挿絵としての物語イニシアルと、装飾としてのイニシアルとの境界線は曖昧であり、画像と装飾とは不可分の関係にあるのである。

人物像を含まず動植物モチーフのみから構成されるイニシアルにも、テキストの内容を間接的・象徴的意味が見出せる可能性は否定できない。メロヴィング朝後期からカロリング朝初期にかけての時代は、鳥や魚、蛇や四足動物といった動物文から成るイニシアルのレパートリーが増加した時期にあたる。従って、この時代の動物文イニシアルが具体的にどのように写本テキストの内容と関連しうるかを検討する必要があるが、これについては稿を改めたい。

*付記：本稿は、2018-2021年度科学研究費基金による研究課題「カロリング朝写本の物語イニシアルをめぐる総合的・地域横断的研究」（研究課題番号18K12239）の研究成果の一部である。

注

- 1 *Opus Caroli regis contra synodum (Libri Carolini)*, herausgegeben von FREEMAN, Ann, unter Mitwirkung von MEYVAERT, Paul, Monumenta Germaniae Historica, Concilia t. 2, supplementum 1, Hannoverae, 1998, Praefatio, p. 99, ll. 15-16: “cum videlicet istae ad ornamentum vel ad res gestas monstrandas fitant, ...”
- 2 *Ibid.*, p. 102, ll. 14-15: “*imagines in ornamentis ecclesiarum et memoria rerum gestarum habentes*...”
- 3 同書は、上記註1のA. フリーマンによる編集の校訂版以前の刊本でも全文を確認することが出来る。*Carolini scriptores qui in ecclesia latina floruerunt. B. Caroli Magni imperatoris opera omnia, juxta editiones memoratissimas Baluzii, Pertzii, Cajetani cennii, recensita et nunc primum in unum collecta*, Patrologiae cursus completus/accurante MIGNE, Jacques Paul, Series secunda, t. 97-98, Parisiis, 1851, 999-1248; *Libri Carolini, sive, Caroli Magni capitulare de imaginibus*, recensuit BASTGEN, Hubertus, Monumenta Germaniae Historica: inde ab anno Christi quingentesimo usque ad annum millesimum et quingentesimum, Legum sectio 3. Concilia t. 2, supplementum, Hannoverae, 1924. 同書は全文の現代語訳に至っていないが、以下で序文及び第4巻18章が日本語に訳出されている。秋山学訳・解題「『カロリング文書』(Libri Carolini)」『西洋美術研究』第6号、三元社、2001年、154-170頁。
- 4 例えば、スポレートで開催されたイタリア初期中世学会のシンポジウム「初期中世に於けるテキストと画像」では、フリーマンによる講演を中心に、著名な中世美術史家らによって『リブリ・カロリーニ』とカロリング期の芸術についての議論が交わされている。同シンポジウムでの講演と議論は論文集として刊行されている。FREEMAN, Ann, *Scripture and Images in the Libri Carolini*, in: *Testo e immagine nell'alto medioevo: 15-21 aprile 1993*

- Settimane di studio del Centro Italiano di Studi sull'Alto Medioevo, 41, 1993, 1994, t. 1, pp. 163-188.
- 5 *Epistula Adriani papae ad beatum Carolum regem de imaginibus*, Patrologiae cursus completus/accurante MIGNE, Jacques Paul, Series secunda, t. 98, Parisiis, 1851, 1247-1292; *Epistolae selectae pontificum Romanorum Carolo Magno et Ludovico Pio regnantibus scriptae*, herausgegeben von HAMPE, Karolus, Monumenta Germaniae Historica, Epistola, t. 5, Epistolae Karoli aevi, III, Berolini, 1899, 5-57.
 - 6 画像に対するグレゴリウス 1 世の思想が読み取れるものとして、マルセイユ司教セレンス (Serenus Massiliensis, 在位596-601年頃) に宛てた書簡が挙げられる。Gregorius Magnus, *Registrum Epistularum* XI, 10, edidit NORBERG, Dag, *Corpus Christianorum*, series Latina CXL A, Turnholti, 1982. 英訳は以下を参照。DAVIS-WEYER, Caecilia (compl.), *Early Medieval Art, 300-1150: Sources and Documents*, Englewood Cliffs, N.J. 1971, pp. 47-49.
 - 7 Beda Venerabilis, *Homeliarum Evangelii libri II*, edidit HURST, David, *Corpus Christianorum*, series Latina CXXII, Turnholti, 1955, p. 93: “*pincturas sanctorum historiarum quae non ad ornamentum solumondo ecclesiae uerum et ad instructionem intuentium proponerentur aduexit uidelicet...*” 英訳は以下を参照。WINTERBOTTOM, Michael, Bede’s Homily on Benedict Biscop (Hom. i. 13), *The Journal of Medieval Latin*, vol. 21, 2011, pp. 35-51. ベーダの思想が『リブリ・カロリーニ』に受け継がれていることは、例えば美術史家C. R. ドッドウェルが指摘している。DODWELL, Charles Reginald: *Anglo-Saxon Art. A New Perspective*, Manchester, 1982, p. 91.
 - 8 エルンストによるこの主張は、ブレンク報告についての議論の中で言及されている。Discussione sulla lezione Brenk, in: *Testo e immagine nell’alto medioevo*, 1994, t. 2, pp. 683-691, here p. 685.
 - 9 *Ibid.*, p. 686. ブレンクの報告論文は以下に掲載されている。BRENK, Beat, Shriftlichkeit und Bildlichkeit in der Hofschule Karls des Grossen, in: *Testo e immagine nell’alto medioevo*, t. 2, pp. 631-681.
 - 10 「物語イニシアル (英: historiated initial; 独: historisierte Initiale; 仏: initiale historiée)」の語義については、以下を参照されたい。JAKOBI-

- MIRWALD, Christine, *Text - Buchstabe - Bild: Studien zur historisierten Initiale im 8. und 9. Jahrhundert*, Berlin, 1998, pp. 11-32.
- 11 「図像を包囲するイニシアル (独: Bildeinschluss-Initiale)」, 「形象イニシアル (英語: figure initial; 独: Figureninitiale; 仏: lettre figurée)」の語義については、以下を参照されたい。JAKOBI-MIRWALD, *op. cit.* 1998, pp. 29-32; eadem, *Buchmalerei. Terminologie in der Kunstgeschichte*, vierte, überarbeitete Auflage, Berlin, 2015, p. 59.
- 12 例えば、オロシウスの『異教徒反駁史』のうち6世紀のラヴェンナで制作されたと想定される写本(フィレンツェ、ラウレンツィアーナ図書館、Plut. 65. 1)には、魚や鳥といったモチーフが文字の一部を構成するイニシアルに加え、文字の開口部に十字架のようなモチーフが描かれている例を含む(fols. 61v, 102r, 173r)。加えて、6世紀のイベリア半島或いは北アフリカに記されている『パウロ書簡』写本(ミュンヘン、バイエルン国立図書館、Clm 6436)には、側面観や正面観による人物の頭部が文字の開口部に描きこまれる例が見出せる(fols. 3r, 21v)。古代末期の文字装飾については、C. ノーデンファルクの研究が詳しい。NORDENFALK, Carl Adam Johan, *Die spätantiken Zierbuchstaben*, 2 Bde., Stockholm, 1970.
- 13 多くの研究者らが、図像を包囲するタイプの物語イニシアルの発明をインスラー写本に帰しているのに対し、A. シャルトはこれをカール大帝宮廷派写本の発明であるとしている。SCHARDT, Alois, *Das Initial*, Berlin, 1938, pp. 48ff; SCHAPIRO, Meyer, The Decoration of the Leningrad Manuscripts of Bede, *Scriptorium*, 12, 1958, pp. 191-207, repr. in: *Late Antique, Early Christian and Medieval Art*, Selected Papers: Meyer Schapiro III, New York, 1979, p. 199; PÄCHT, Otto, *Buchmalerei des Mittelalters*, München, 1984, p. 77.
- 14 Fols. 31r, 53r. 同写本の詳細については、以下を参照されたい。*The Vespasian Psalter. British Museum, Cotton Vespasian A. I.* (ed. by WRIGHT, David Herndon), English Manuscripts in Facsimile, 14, Copenhagen, 1967; 拙稿「『ヴェスパシアン詩編』: London, British Library, Cotton MS Vespasian A I」『東京芸術大学西洋美術史研究室紀要 (Aspects of Problems in Western Art History)』第16号、2018年、72-77頁。
- 15 Fol. 27v. 同写本の詳細については、以下を参照されたい。*The Leningrad Bede. An Eighth Century Manuscript of the Venerable Bede's Historia*

- Ecclesiastica Gentis Anglorum in the Public Library, Leningrad* (ed. by ARNGART, O.), *Early English Manuscripts in Facsimile*, 2, Copenhagen, 1952; SCHAPIRO, *op. cit.*
- 16 例えばfols. 1v, 42r, 42v, 143v等。同写本のファクシミリは刊行されていないが、モノグラフィックな研究としては以下が挙げられる。TEYSSÈDRE, Bernard, *Le Sacramentaire de Gellone et la figure humaine dans les manuscrits francs du VIII^e siècle*, Toulouse, 1959.
- 17 カール大帝宮廷派の彩飾写本では、この他、《アブヴィル福音書》(アブヴィル、市立図書館、Ms. 4)、《サン・メダール・ド・ソワッソン福音書》(パリ、国立図書館、Ms. lat. 8850) が挙げられ、いずれも800年頃のアーヘンに制作時期・地域が帰されている。カール大帝宮廷派写本の写本学的詳細については、以下に詳しい。KOEHLER, Wilhelm/ MÜTHERICH, Florentine, *Die karolingischen Miniaturen*, Bd. 2, *Die Hofschule Karls des Großen*, Berlin, 1958.
- 18 同写本の全てのイニシアルを分析した研究として、U. クーダーの未刊の学位論文が挙げられる。KUDER, Ulrich, *Die Initialen des Amienspsalter (Amiens, Bibliothèque municipale MS 18)*, Ph.D. Diss., Ludwig-Maximilians-Universität, München, 1977.
- 19 LAMPRECHT, Karl, *Initial-Ornamentik des VIII. bis XIII. Jahrhunderts. Vierundvierzig Tafeln meist nach Rheinischen Handschriften nebst erläuterndem Text*, Leipzig, 1882.
- 20 SCHARDT, *op. cit.*; van MOË, Emilie A., *La lettre ornée dans les manuscrits du VIII^e au XII^e siècle*, Paris, 1949.
- 21 THIEL, Erich Joseph, *Studien und Thesen zur Initialen-Ornamentik des früheren Mittelalters*, Frankfurt am Main, 1963; GUTBROD, Jürgen, *Die Initiale in Handschriften des 8. bis 13. Jahrhunderts*, Stuttgart, 1965.
- 22 MAZAL, Otto, *Das Buch der Initialen*, Wien, 1985; SAUERLÄNDER, Willibald, *Initialen. Ein Versuch über das verwirrte Verhältnis von Schrift und Bild im Mittelalter*, Wolfenbüttel, 1994.
- 23 PÄCHT, Otto, *op. cit.* pp. 45-95.
- 24 BRUBAKER, Leslie, *The Introduction of Painted Initials in Byzantium*, *Scriptorium*, 45, 1991, pp. 22-46; MAAYAN-FANAR, Emma, *Byzantine Pictorial Initials of the Post-Iconoclastic Period (From the End of the 9th*

- Century to the Early 11th Century*), Ph.D. Diss., The Hebrew University of Jerusalem, 2003; eadem, *The Fragmental Body. The Place of Human Limbs in Byzantine Illuminated Initials*, *Byzantion*, 76, 2006, pp. 241–263; eadem, *Revelation Through the Alphabet: Aniconism and Illustrated Letters in Byzantine Artistic Imagination*, Geneva, 2011.
- 25 齊藤稔『イニシアルのデザイン：中世写本の装飾文字』岩崎美術社、1975年。
- 26 越宏一編『中世の写本画と工芸』（週刊朝日百科39）朝日新聞社、1979年；同著『ヨーロッパ中世美術講義』（岩波セミナーブックス82）岩波書店、2001年；同著『西洋美術論考：古代末期・中世から近代へ』中央公論美術出版、2002年。
- 27 JAKOBI-MIRWALD, *op. cit.* 1998.
- 28 本写本に関する主要な先行研究は以下が挙げられる。ZIMMERMANN, Ernst Heinrich (Hrsg.), *Vorkarolingische Miniaturen*, Berlin, 1916, pp. 126–130, Taf. 267–279; NETZER, Nancy, *Cultural Interplay in the Eighth Century. The Trier Gospels and the Making of a Scriptorium at Echternach*, Cambridge, 1994; JOHANNSEN, Annika, *Der Trierer Tetrapmorph. Zu fol. 5v des Codex' 61 im Domschatz*, Berlin, 2007; WILHELMY, Winfried, Thomas-Evangeliar, in: *In Gold geschrieben. Zeugnisse frühmittelalterlicher Schriftkultur in Mainz*, hrsg. von WILHELMY, Winfried/ LICHT, Tino, Regensburg, 2017, pp. 91–97, Kat.-Nr. 11.
- 29 NETZER, *op. cit.*, pp. 4–16, 25.
- 30 *Ibid.*, p. 35.
- 31 WILHELMY, *op. cit.*, pp. 91–92.
- 32 NETZER, *op. cit.*, p. 53.
- 33 *Ibid.*
- 34 本写本に関する主要な先行研究として、以下が挙げられる。ZIMMERMANN, *op. cit.*, pp. 145, 307–308, Taf. 329b–329c; LOWE, Elias Avery, *Codices Latini Antiquiores*, VI, Oxford 1953, no. 740; GUTBROD, *op. cit.*, pp. 131–132; ALEXANDER, Jonathan James Graham, *The Decorated Letter*, London, 1978, p. 11.
- 35 ZIMMERMANN, *op. cit.*, p. 21.
- 36 LOWE, *loc. cit.*

- 37 *Catalogue général des manuscrits des bibliothèques publiques de France*.
Départements - tom. XVII: Cambrai, Paris, 1885, p. 174.
- 38 GUTBROD, *op. cit.*, p. 131.
- 39 GUTBROD, *op. cit.*, p. 132.
- 40 本写本に関する主要な先行研究は以下の通り。MESSERER, Wilhelm, Zum
Juvenianus-Codex der Biblioteca Vallicelliana, in: *Miscellanea Bibliothecae
Hertzianae*, München, 1961, pp. 58–68; MÜTHERICH, Florentine,
Manoscritti Romani e Miniatura Carolingia, in: eadem, *Studies in
Carolingian Manuscript Illumination*, London, 2004, pp. 416–432, here p. 419;
ZONGHETTI, Alberto, Il codice di Gioveniano, *Arte Medievale*, n.s. 4, 2005/
1, pp. 21–36. 銘文の詳細は、ZONGHETTI, *op. cit.*, p. 35, note 58を参照。
- 41 LOWE, *op. cit.* IV, p. 8, no. 430.
- 42 MESSERER, *op. cit.*, p. 58; ZONGHETTI, *op. cit.*, p. 21.
- 43 ZONGHETTI, *op. cit.*, p. 21.
- 44 本写本に関する主要な先行研究は以下が挙げられる。Karl der Große. *Werk
und Wirkung*, Ausstellungskatalog, Aachen, 1965, pp. 284–285, Nr. 462;
BELTING, Hans: Probleme der Kunstgeschichte Italiens im
Frühmittelalter, *Frühmittelalterliche Studien*, 1, 1967, pp. 94–143, here pp.
131–132; BISCHOFF, Bernhard, *Mittelalterliche Studien*, Bd. 2, Stuttgart,
1967, p. 297; CRIVELLO, Fabrizio, *Le «Omèlie sui Vangeli di Gregorio
Magno a Vercelli»*, *Le miniature del ms. CXLVIII/8 della Biblioteca
Capitolare*, Firenze, 2005.
- 45 BISCHOFF, *op. cit.* Bd. 2, p. 297, BELTING, *op. cit.*, pp. 131–132.
- 46 CRIVELLO, *op. cit.*, pp. 37–50.
- 47 NEES, Lawrence, *Le «Omèlie sui Vangeli di Gregorio Magno a Vercelli»*.
Le miniature del ms. CXLVIII/8 della Biblioteca Capitolare (Review),
Speculum, vol. 83/1, 2008, pp. 185–188.
- 48 CRIVELLO, *op. cit.*, p. 59; VON EUW, Anton, Die Darstellung zum 90. (91.)
Psalm in der frühmittelalterlichen Psalter- und Evangelienillustration mit
Ergänzungen aus Kommentaren, in: *The Illuminated Psalter: Studies in
the Content, Purpose and Placement of Its Images* (ed. by BÜTTNER,
Frank O.), Turnhout, 2004, pp. 405–411, here p. 408.
- 49 本写本に言及する主要な研究としては、J. オズボーンの論文が挙げられ

- る。OSBORNE, John, The Use of Painted Initials by Greek and Latin Scriptoria in Carolingian Rome, *Gesta*, 29/1, 1990, pp. 76-85.
- 50 LOWE, *op. cit.* I, no. 18b.
- 51 OSBORNE, *op. cit.*, p. 80.
- 52 OSBORNE, *op. cit.*, p. 85, note 35.
- 53 CAVALLO, Guglielmo, Interazione tra scrittura greca e scrittura latina a Roma tra VIII e IX secolo, *Miscellanea Codicologica F. Masai dicata*, 1, Ghent, 1979, vol. 1, pp. 23-29, here pp. 25-27.
- 54 OSBORNE, *op. cit.*, p. 81.
- 55 本写本が言及される主要な先行研究は以下の通り。ELBERN, Victor H./REUTHER, Hans, *Der Hildesheimer Domschatz*, Hildesheim, 1969, pp. 67-68, Kat-Nr. 68; BAUER, Gerd, *Corvey oder Hildesheim? Zur ottonischen Buchmalerei in Norddeutschland*, Ph.D. Diss., Universität Hamburg, 1977, Bd. 1, p. IV, Anm. 1; KUDER, Ulrich, Evangeliar, in: *Bernward von Hildesheim und das Zeitalter der Ottonen*, Ausstellungskatalog, Hildesheim/ Mainz, 1993, Bd. 2, p. 450, Kat-Nr. VII.4.
- 56 KUDER, *op. cit.* 1993, p. 450.
- 57 カロリング朝写本に於ける「生命の泉」図像の受容については、以下で詳しく論じている。拙稿「《コルビー詩編》の『生命の泉』—カロリング朝美術に於ける図像と装飾の統合をめぐる—」『西洋中世研究』第10号、2018年、121-147頁。

図版出典

CRIVELLO, *op. cit.*: Figs. 5a-c; NETZER, *op. cit.*: Figs. 1a-b; OSBORNE, *op. cit.*: Figs. 6a-b; ZONGHETTI, *op. cit.*: Figs. 4a-e; Deutsches Dokumentationszentrum für Kunstgeschichte, *Bildarchiv Foto Marburg*. <<https://www.uni-marburg.de/de/fotomarburg>>: Figs. 1c-f, 7a-b; L'Institut de recherche et d'histoire des textes, *Bibliothèque virtuelle des manuscrits médiévaux*. <<https://bvmm.irht.cnrs.fr>>: Figs. 2a-b; *e-codices: Virtual Manuscript Library of Switzerland*. <<https://www.e-codices.unifr.ch>>: Figs. 3a-g